

第1章 『婦人之友』誌の資料的価値の検討

第1節 『婦人之友』誌の概要

1. 創刊当時の状況と『婦人之友』誌の社会的影響

『婦人之友』誌は、羽仁もと子が『家庭之友』誌編集の職を離れた後、1908(明治41)年1月20日に創刊した月刊誌である。1908年といえば、日清(1894(明治27)年)・日露(1904(明治37)年)の両戦争を経て、わが国が近代資本主義国家への成長を進め、都市に働く人々が急速にふえていった時代である¹⁾。なかでも官吏・教員・医師・会社員などは新しい階層—都市の「中流階層」—を形成するようになる。『婦人之友』誌はこうした新しい都市の「中流階層」の「主婦」を対象に²⁾、キリスト教の思想を背景にしながら新しい家庭生活像を求めて創刊された「生活を考える雑誌」³⁾である。創刊当時の発行部数は「婦人之友社」にも記録がなく、「雑誌の読者の少ない当時のこと、多分2, 3千部も発行してはいない」⁴⁾とする推察しかないが、戦前には6～7万部、戦後は12～13万部を発行していた³⁾といわれている。

発刊当初の『婦人之友』誌は、目次がそのまま表紙になっている、素朴で、色も挿し絵もなく、活字ばかりが並んだ小さな雑誌である。雑誌というよりは、冊子と呼ぶのが似つかわしい。本文わずかに30数頁から40数頁程度、頁もふられていない。その小さなさやかな『婦人之友』誌が1911(明治44)年に体裁を一新する。1911年4月の第4巻3号に、後付の一としてつぎのような社告が載せられ、次号の第5巻1号(1911年6月)からは、内容が質量ともに充実し、あわせて表紙なども画壇の寵児、^{ひらふくひやくすい}平福百穂画伯の清新典雅な絵によって飾られることになる。

社 告

次號より紙數を増加して百三十頁内外となし採色石版繪二枚光澤寫眞版口繪八頁を添え高雅清新の裝いを以て世に出づべく不變御愛讀願上候

從て定価を左記の通り改正致候

一冊 金十五錢 (郵税 一錢五厘)

六冊 (半年分) 金九十錢 (郵税とも)

十二冊 (一年分) 金一圓七十五錢 (郵税とも)

『婦人之友』誌が創刊された当時の女性や家庭に関する出版物の状況をみると⁵⁾、明治時代の末から大正時代のはじめにかけては女性解放の気運が高まり、1901(明治34)～1902(明治35)年には堺 枯川の『家庭の新風味』が発表され、1904(明治37)年にはベーベルの『婦人論』が『婦人問題の解決』と題して訳出される。1907(明治40)年には堺 枯川の『婦人問題』が出版される。婦人雑誌も『女學雑誌』(1885(明治18)年7月創刊 途中から巖本善治編集)が発行され、1903(明治36)年4月3日には『婦人之友』誌の前身といわれる『家庭之友』(内外出版協会)が創刊される⁶⁾。前二者が婦人解放思想の強いものであったのに比べ、『家庭之友』→『婦人之友』誌は、より家庭生活に密着した雑誌であった。明治時代のおわりには『新婦人』、『新女學』、『女學世界』、『淑女かがみ』、『婦人くらぶ』、『女子文壇』、『婦人画報』、『婦人世界』などがあったといわれ、大正時代に入ると『婦女界』、『主婦之友』、『婦人倶楽部』など、発行部数40～60万部を誇る大衆的な女性誌が次々創刊され、『婦人公論』も発刊される。『婦人之友』誌も大衆性と啓蒙性をめぐって岐路に立たされるが、結局ある程度大衆性を無視しても理想を掲げてすすむことになる⁷⁾。

当時の出版事情についてはよくわからないことが多い。雑誌の出版が現在ほど大がかりなものではなく、限定された個人誌のようなものも多かったので、調査が進んでいる雑誌のなかでも、数回の発行で廃刊になっているものもあり、それぞれの内容はもちろん、ボリュームや発行部数などの調査だけでも網羅的にあきらかにすることは難しい。

ただ、住生活の変容が急速に進む大正時代には、『婦人之友』誌が他の大衆性を重視した婦人雑誌に比べると、数の上ではマイナーな存在だったことは確かである。しかし数は少なくとも根強い影響力をもっていたことも事実である。そのことは、1930(昭和5)に「全国友の会」が設立されることやその後の活動、そして何よりも『婦人之友』誌が今日まで継続的に発行されつづけていることからわかる。

『日本婦人問題資料集成』の編集者、丸岡秀子の「観念に堕せず技術に停滞せず読者との協同によって、その主張を生活の中に実現してゆく、この実験精神こそ羽仁もと子の原点であった」という評は『婦人之友』誌の特徴をよくあらわしている。

2. 掲載記事の内容の特徴

記事の内容には、いくつかの特徴がある。

(1) あたらしい家庭生活像

いちばん大きな特徴は、羽仁もと子の思想を反映して、あたらしい家庭生活像を求めようとしていることである。「近代の家庭が要求する主婦」(1911)、「旧思想旧習慣に打勝ち得た愉快」(1921)、「われらの描く新家庭」(1921)、「世の中はまだこのやうに階級的です」(1922)、「生活改革を主題としての座談會」(1930)などの記事がみられる。

『婦人之友』誌が求めるあたらしい家庭生活像についての詳しい分析は本研究の主題ではないが、『婦人之友』誌読者の住生活観をみていくために概観しておく。

あたらしい家庭生活像の第1の性格は、洋風に学ぶということである。「質素なる米國の生活」(1909)、「千五百圓で出来る洋風の住宅」(1911)、「中等の洋風住宅」(1911)、「中流の洋風住宅に要する家具」(1912)、「西洋風にした書齋」(1913)、「洋風子供室」(1916)、「内容を主とした西洋館」(1919)、「建築から見た米國の家庭生活」(1921)など、洋風を紹介する記事も多く、とりわけ大正時代に入ると、「日本の風土に適合せしめた洋風建築」(1913)、「英風を加味した我家の教育法」(1914)、「西洋生活と日本生活」(1914)、「能率から見た西洋の生活と日本の生活」(1917)、「和洋の調和のよくとれた食堂と臺所」(1917)、「日本間を涼しげな洋風にするには」(1928)のように、わが国の生活への洋風のとり入れ方に関心が向いている。

あたらしい家庭生活像の2番目の性格は、生活の合理化や能率化の問題への関心である。「簡易なる園遊會の工夫」(1909)、「時間勵行の實驗」(1909)、「手輕に客を呼ぶ食事の用意」(1913)、「私の工夫しました料理臺」(1913)、「虚禮廢止問題」(1915)、「簡素な生活から創み出す仕事」(1926)、「家庭生活合理化」(1930)、「中流家庭いかに不合理なるかの實例」(1931)、「家庭生活合理化展」(1932)などにあらわれている。合理、能率の他にも簡素、工夫などの言葉がたくさんみられる。また「儉約の徳」(1908)、「五つの儉約法」(1908)、「質素儉約の實驗」(1909)、「家事の予定によりて得たる利益」(1909)、「我家に於て見出したる不經濟」(1909)など、儉約ということにも意を用いている。

あたらしい家庭生活像の3番目の性格は、家族の日常生活を大切に考えようという姿勢

が強いことである。第5章でも詳しく述べるが、「家族本位」，「子供本位」という用語もたくさん用いられ，「家族主義」(1916)，「夫婦本位」(1914)などという表現もみられる。たまに来る客や儀式よりも，子どもや家族の日常生活を大切に考えようとしている。

また，「夫婦平等の基礎に立つ米國人の家計」(1914)のように夫婦の平等に注目した記事もあり，こうしたことを観念だけではなく，具体的に考え日常生活のなかに体现しようとしていったところに『婦人之友』誌の特徴がある。

このこととも関連して，あたらしい家庭生活像の4番目の性格は，女性像にもあたらしさを求めようと務めていることである。封建的なイエ制度を見なおすような視点はほとんどみられず，同じ時代に，「主婦とは婦人の社会的形態のうち，もっともおくれた形態であり」，「封建制度が家族制度のうちに婦人を制約したところの，具体的，抽象的な存在物」であると分析し，「家庭の社会化は婦人解放のあらわれである。婦人の社会的進出こそ，婦人を無知蒙昧から救うことをはっきりと述べている女性がいた⁸⁾」ことを考えると，『婦人之友』誌は良妻賢母主義的な考え方をすこしもでていないともいえるが，家庭のなかにあってだけは，その中心となって主体的に生きる「主婦」像が描かれている。食後などに子どもたちもみな打ち寄って来るような「主婦室」や「主婦居間」などに象徴されるように，家庭運営の中心としての「主婦」像が生き生きと描かれている。客観的には『婦人之友』誌読者のほとんどは専業「主婦」であったが，「主婦となっても職業を」(1921)，「アパートに住んで働く夫婦」(1929)のような記事がみられることにも心を留めておきたい。

そして，あたらしい家庭生活像の5番目の性格は，子どもの自立について議論されていることである。たとえば，「子供と獨立心」(1913)，「何うして子供に労働を教へませうか」(1915)，「彼等を自治に導く子供二人の勉強部屋」(1932)である。

(2) 女性のための総合雑誌

『婦人之友』誌の記事の内容の特徴の2番目は，家庭生活のあり方や女性の生き方にかかわること，衣・食・住の問題や家計の合理的な運営，保育や子育てなどのほか，人生論や時事問題，文芸欄まで広範な問題を取りあげていることである。大正期を中心としたデモクラシー期の『婦人之友』誌は，「生活を考える雑誌」という以上に，女性のための総合雑誌という性格の強いものであった。このため，住宅や住生活に関しても単に技術的な

側面だけではなく住居観を採取できる資料である。

当時の『婦人之友』誌には、衣・食・住・保育や育児・家計や家庭経営に関する記事ばかりではなく、人生論・時事問題や文芸などもたくさん掲載されているが、それぞれの内容がどれ位の割合を占めているかを計量的に把握することはむずかしい。家計、管理に関する記事が比較的多く、衣・食・住生活などの記事も経営管理的な視点でとりあげられているものがたくさんあるが、これを衣・食・住それぞれの項目に分類するか、管理の項に分類するかということによっても、記事の内容の計量的分類傾向が異なると考えられる。たとえば、住居費や食費に関する記事があり、それを住生活・食生活の項に分類するか、家計の項に分類するかという問題である（住生活関連記事の分類については、第2章 第2節で詳しくみているが、その折、分類項目として住居費・住宅問題の項を設けたので、住居費に関する記事は住生活関連記事に入れている）。それでもおおまかな傾向を知るために、いくつかの年をとって計量してみたところ、頁数の割合で、人生論・時事問題が約2割、文芸欄が約2割、食生活が1割強、家計が1割、保育・育児が1割弱、衣生活が1割弱、住生活が数%位である。もちろん、その他の記事もかなりある。また、『婦人之友』誌は社会状況、とくに社会経済的な状況や戦争の影響を強く受けて、内容が時代とともに変化しているが、1934年までは上記の比率にはそれほど変化がない。

ちなみに、『婦人之友』誌は1916年3月号から1921年1月号まで、各号に号名をつけているが、順次あげると

		1917	1 新年希望	1918	1 新年開運
年	月	1917	2 運命開拓實例	1918	2 新旧調和
1916	3 子供	1917	3 家庭能率増進	1918	3 婦人職業問題
1916	4 安価生活	1917	4 婦人獨立自活	1918	4 春期特別
1916	5 家庭圓滿	1917	5 夫婦問題	1918	5 虚栄生活寫實
1916	6 現代風俗	1917	6 良家風	1918	6 子供教育養育
1916	7 婦人健康	1917	7 女中問題	1918	7 心身健全
1916	8 簡易休養	1917	8 理想生活	1918	8 生活愉快
1916	9 家庭食物	1917	9 生活難易	1918	9 無駄なき生活
1916	10 男女問題	1917	10 結婚禍福	1918	10 世態人情
1916	11 安心立命	1917	11 世帯經營	1918	11 生活革新
1916	12 家計整理	1917	12 年末家事反省	1918	12 年末いましめ